教育機関の連携による看護職を対象とした災害に対する備え教育

山手美和[1)]、吉田俊子[1)]、塩野悦子[1)]、大沼珠美[1)]、渡邊聡子[2)]、
工藤美子[2)]、中山亜由美[2)]、岡本由紀子[2)]、山本あい子[2)]

キーワード：災害、教育、備え、看護職

要　旨

宮城大学と兵庫県立大学看護学研究科が連携し、21世紀COEプログラム「ユビキタス社会における災害看護拠点の形成」の一環として、看護職者を対象に災害に備えるためのワークショップを開催した。宮城県内15病院と1助産院から73名の看護職者がワークショップに参加した。第1回目は視聴覚教材を用い、講義とグループワーク形式で災害時の備えに関する知識の確認と意見交換を行った。第2回目は病棟で実際に取り組んだ具体的な内容を発表し、災害に対する備えの現状と課題について意見交換を行った。今後は、ワークショップでの課題を基に災害に対する備えを継続していくことが重要である。

Educating People in the Nursing Profession for Disaster Preparedness with the Cooperation of Educational Institutions

Miwa Yamate[1)], Toshiko Yoshida[1)], Etsuko Shiono[1)], Tamami Onuma[1)], Satoko Watanabe[2)],
Yoshiko Kudo[2)], Ayumi Nakayama[2)], Yukiko Okamoto[2)], Aiko Yamamoto[2)]

Key words：disaster, education, preparedness, nurse

Abstract：

The Miyagi University School of Nursing, in conjunction with the University of Hyogo, Graduate School of Nursing, held workshops for people in the nursing profession on how to prepare for disasters. This was done as an activity of the 21st century Center of Excellence Program "Development of a Center of Excellence for Disaster Nursing in a Ubiquitous Society." Among the participants were 73 nurses from 15 hospitals and a maternity center in Miyagi Prefecture. In the first workshop, we provided lectures by using audiovisual materials on disaster nursing. We also had the participants work in groups to make sure they knew what to do in preparation for a disaster, and we asked them to exchange opinions too. In the second workshop, the participants were asked to talk about specifically what they had done in their medical institutions to prepare for a disaster, and to exchange opinions about the present conditions of preparedness and problems involved in preparing for a disaster. It is important that we continue to prepare for a disaster by addressing the issues raised in the workshops.

1）宮城大学看護学部　Miyagi University School of Nursing
2）兵庫県立大学看護学部　University of Hyogo, College of Nursing Art & Science

Ⅰ　はじめに

宮城県沖地震発生の可能性は、年々高まっており、平成12年に国の地震調査委員会が公表した「宮城県沖地震の長期評価」では、今後30年程度以内に、99％の確率で次の地震が起こる可能性が高いと指摘されている。宮城県では、現在、防災マップ作成ガイドライン、総合防災情報システム(MIDORI)、「みやぎ震災対策アクションプラン(平成15年)」に基づく整備建造物の耐震化や総合防災情報システムの整備、地震・津波被害想定調査などソフト・ハード両面にわたり地震防災対策が進んでおり、県民に対して地震に対する備えの重要性について勧告している[1)]。

災害看護分野において災害発生前の静穏期の取り組みとして、看護基礎教育や継続教育・現任教育の一環としての災害看護教育、救護訓練などによる人材育成、救護資機材や設備などの整備点検、災害発生時の緊急対応ネットワークの構築や確認などがあげられる。しかしながら、災害に対する知識不足、金銭的負担感、業務の忙しさ、災害の発生に対するあきらめ、備えることを忘れてしまうなどの認識の問題が複雑に絡み合い、災害への備えに関する行動化を困難にさせていることが報告されている[2-3)]。

医療現場の災害に対する宮城県の対策では、「みやぎ震災対策アクションプラン(平成15年)」の「災害応急体制の整備」として、傷病者の病院前救護・搬送体制の強化、医療施設における防災体制の整備、災害拠点病院と後方支援機能を有する病院等との連携推進、行政と医療施設間及び医療施設間相互の通信手段の整備などの救急救助・医療体制の整備、災害に対しての備え・災害発生時の対応が検討されはじめているが、実際の医療機関において現実的な対策は十分とられているといえず、各医療機関で現実に即した災害への備えをしておくことの重要性は高く、かつ急務であるといえる。

阪神・淡路大震災の経験をもとに災害看護について先駆的に取り組んでいる兵庫県立大学看護学部においては、21世紀COEプログラム「ユビキタス社会における災害看護拠点の形成」(拠点リーダー：山本あい子教授)が採択され、21世紀型の新しいまちづくりのコンセプトであるユビキタス社会において、災害発生前の備えから始まり、災害直後から中・長期までを視野に入れて災害によって生じる生命や健康への被害を最小限に抑えるための看護の支援方法と情報ネットワークの構築を推進している。今回、我々は本研究の一環として、看護ケア方略研究部門母性看護ケア方法の開発プロジェクトと共同し、医療機関における具体的な災害への備えに対する取り組みを行うためのワークショップを宮城県内の看護職者を対象に宮城大学にて開催し、具体的方法について考える機会をもった。以下、その開催概要について報告する。

Ⅱ．ワークショップの内容

本ワークショップは、兵庫県立大学看護学研究科21世紀COEプログラム看護ケア方法の開発プロジェクト母性班によって開発されたプログラムである。このプログラムは、災害に対する備えの意識を高め、実際に備えることを意図して作成されており、①看護職が災害に具体的に備えることができる、②お互いの取り組みや意見交換を通して様々な方法を具体的に学ぶことができる、という特徴がある。プログラムは４つの方法、①CDを用いた自己学習、②CDで得た知識を確認するための講義と自分が勤務している職場の備えの状況をその場で査定できるグループワーク、③勤務している職場で実際に備えること、④実施に取り組んだ内容の参加者間での共有、からなる。災害に備えるための知識内容には、災害に備えて安全な環境を考える上での視点、避難経路・方法を考える上での視点、患者と妊産褥婦が災害に備えるために必要な内容、災害時に安否確認を行う際の視点、ライフラインが途絶えた時の対応、さらに、産婦人科病棟に勤務する看護職を対象に、災害時に妊産褥婦と新生児に起こっていた心身の反応を含んでいる。また、備えに取り組むために、１回目と２回目ワークショップの間に１ヶ月の実施期間を設け、２回目ワークショップでは実際に取り組んだこと・取り組めなかったことを共有し、今後の取り組み上での示唆が得られるようにプログラムを作成している。

1．第1回ワークショップ開催まで

ワークショップの開催に当たり、宮城大学看護学部が看護実習を行っている病院・施設、宮城県内の災害拠点病院、産婦人科病棟を有する病院・施設を中心にワークショップの目的、方法などについて説明し、参加を募った。対象者は2回のワークショップに継続して参加できる方で、研究協力の同意が得られた看護職とした。ワークショップ参加希望者全員に対して、事前にCD視聴による自己学習を行ってもらった。倫理的配慮としては、ワークショップの参加は研究協力と同意義であり、参加者については匿名性とプライバシーを保持することを文書と口頭で説明し、同意を得た。

2．第1回ワークショップ開催

平成18年8月6日（日）に開催した第1回ワークショップは「災害への備え」に必要な知識を知った上で、個人ならびに病棟全体での取り組み方法を考えることを目的として行った。また、平成18年9月18日（月）に開催した第2回ワークショップは他施設の取り組み内容を共有し、未改善のものあるいは継続するための方法を考えることを目的として実施した。

第1回ワークショップに参加した看護職者は16病院26病棟73名であった。第1回ワークショップは、参加者全員に対して、災害への備えに必要な視点についてCDを使用しながら説明し、参加病棟ごとに病棟の避難経路図や資料等を活用しながら、災害への備えの視点に関する病棟の問題点や取り組むべき課題・対策について明確化を図るために、グループワークを行い、参加者全員で意見交換を行った。さらに、第2回ワークショップに向けて「グループワークで考えた対策を各病棟で実際に取り組む」という内容の課題を出し、各病棟での取り組みの内容がわかるように、病棟ごとにデジタルカメラで事前・事後の状態を記録してもらい、改善できた点・改善できなかった点とそれぞれの理由について記載し、第2回ワークショップの際に提出してもらうこととした。

3．第2回ワークショップ

第2回ワークショップに参加した看護職者は16病院26病棟69名であった。一般病棟と産婦人科系病棟と2グループに分け、各病棟5分程度でパワーポイントを使用しながら災害への備えの対策に関して改善できた点・改善できなかった点など病棟での具体的な取組について発表を行った。主な改善点としては、物品の落下防止・避難経路の確保などの対策や非常持ち出し袋などの整備などについて発表が行われた。また、病棟の特殊性が起因する問題、病院全体での取り組みに関する課題など、改善できなかった面なども発表され、今後の課題について明確化された。発表のあと、各グループで適宜質疑応答の時間をとり、参加者らが意見交換を行い、参加者が災害の備えとして取り組んだ具体的内容についての共有化を図った。また、災害に対する取り組みを行った上での疑問点や改善できなかった点などについて、相互に意見を出し合い解決の糸口を探った。今回のワークショップでは、宮城県内の医療機関の災害に対する備えの現状と課題について確認し、また、今回取り組んだ内容を継続していくことの重要性を再確認した。

Ⅲ．今後の課題

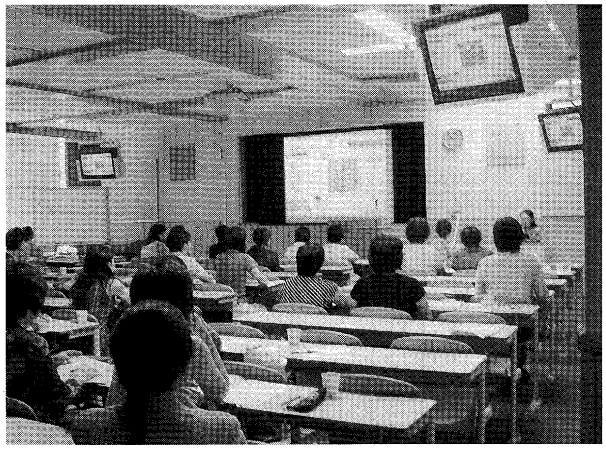
今回のワークショップを通して、参加した看護職者の災害に対する備えに取り組む意識の高さが感じられた。宮城県内の看護職者が一同に介して各病院・病棟の災害への備え・対応の状況について意見交換したことは、病院・病棟間のみならず地域での具体的な災害への備えの方策に取り組むための一助になったと考える。静穏期にあたる今、看護職者が災害看護の基礎知識をもち、施設を災害への備えの視点で振り返り、災害に対する備えの現状を認識・改善できたことは、災害への備えに対する看護職者の役割の明確化を図っていく上でも有意義であったと考える。今回のワークショップでの気づきを基に、マニュアルの作成・整備、病院・病棟内の環境整備、必要物品の備蓄などの具体的な備えや実際に災害が発生した際の具体的行動の検討がなされ、日々の業務の中で災害への備えを意識した行動を行っていくことが災害時の被害を最小限にするためにも望まれる。今後、これらの活動をもとに病棟単位だけでなく、

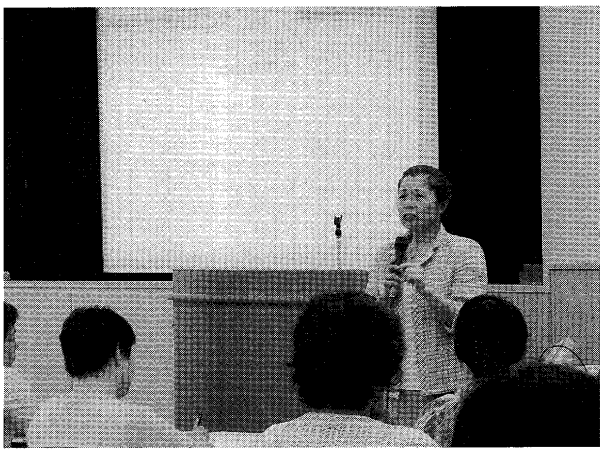
病院全体、地域・県内全体の災害に対する備えについての看護の役割について検討を重ねていくことが重要であるといえる。

臨床の現場における災害に対する備えの具体的な行動化が困難など災害看護に関する課題は山積している。災害時において看護学が貢献できる内容として、人々の健康を維持、改善して生活を整えていくために中長期的な支援を行っていくことが求められている。災害を受けたことによって、生活の場が変化すると共に、健康ニーズも変化するため、それに対応した看護の役割があり、担っていくことが求められる。これらの看護の役割を効果的に実施できる看護職の育成には、看護基礎教育課程、医療機関などにおける災害看護教育を実施していくことが重要である。宮城大学看護学部においても災害医療・災害看護に該当する内容の講義は行われているものの、体系化された教育はまだ行われておらず、災害看護に関する知識や技術を持った看護職の育成への課題も再確認することができたといえる。

今回のワークショップでは宮城県内の看護職が共に災害看護を考えていく場を提供することができた。今後は、ワークショップの成果を基に、災害における看護職役割構築にむけて地域の医療機関との連携を本学で進めていきたいと考える。

なお、第1回ワークショップについては、河北新報2006年8月7日朝刊に掲載、第2回ワークショップについては2006年9月18日18時45分からのNHKてれまさむねにて放映された。





＜引用文献＞

1）宮城県ホームページ.
http://www. pref. miyagi. jp/kikitaisaku/chouki/bousaihptop. htm

2）山本あい子：災害と人々の健康と看護. 日本看護科学学会誌, 26（1）, 56－61, 2006

3）小原真理子:災害看護の定義と概念. インターナショナルナーシングレビュー, 28（3）, 12－13, 2005

4）兵庫県立大学大学院看護学研究科/地域ケア開発研究所：21世紀COEプログラム「ユビキタス社会における災害看護拠点の形成」 平成17年度活動報告　看護ケア方略の開発部門　母性看護ケア方法の開発プロジェクト. 兵庫, 2006

5）兵庫県立大学看護学研究科21世紀COEプログラム.
http://www. coe－cnas. jp/index. html